OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	回想の懐徳堂
Author(s)	小倉, 正恒; 武内, 義雄; 鈴木, 虎雄 他
Citation	懐徳. 1957, 28, p. 102-114
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90317
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

回想の懐徳堂

懐徳堂に關する隨想

小倉正恒

○

江戸時代の初期以來、大阪地方は西南の要津に當り、五方財貨の集散地となつた。それ故大阪人は利に敏く機に鋭く、通商交易に就いては自然に修業體得したのである。かかる次第で大阪は形勢上學問文化の發達には關係が尠かつた。これまた當然の事である。

其後大阪は發達するにつれて學問文化も發生した。五井持軒が其首唱とされる。尋で享保年間となると、ここに懐徳堂建立となり、遙かに江戸の昌平黌と呼應するやうになり、三宅石庵、中井甃庵、持軒の子蘭洲等が引きつづき教授の任に當り、文化の氣運が漸次進展し、甃庵の二子竹山、履軒が出づるに及んで、懐徳堂の學風が大いに揚り、隱然として昌平黌に拮抗するまで推進した。この時を大阪文化の最も盛んな時とする。

○

大阪は商業地である。ここでは社會の實際を知り人事の眞相に觸れるから、それより生ずる人心の傾向は、空漠で實用に當らぬものは取上げられぬ。卽ち實際に卽するといふ事が商業地の特長である。學問文化もまたそれに密接な關係があり、所謂る實學が起るのである。

前輩の言に、江戸時代の三百年間、人より少しも啓發されずに創見の說を立てたものは富永仲基の「出定後語」と三浦梅園の「三語」及び山片蟠桃の「夢の代」の三著述であるとの事である。この三著述を簡單に說明すると、「出定後語」は佛教を研究したもので、大乘非佛の主張を論理の上に研究の方法を組み立てたもの、「三語」は「玄語」と「贅語」「敢語」の三部で、「玄語」は天地の眞相を天地に求め、「贅語」はそれを古今を引いて詳論し、「敢語」は餘論で、人倫の事を明かにしたもの、西洋の天文生理の諸學に關係があり、「夢の代」は天文、地理、制度、經濟等十二項に涉りて自己の說を書いたもの、これも西洋の天文學に關係がある。さうしてこの三人の中、富永仲基と山片蟠桃の二人は大阪人である。實

際に卽應して根本に集注し、それより發展したのであるから、大阪實學の標本たるのみならず、實にその絶頂に立つものである。

當時江戸の學風は、名高き寛政の三博士、柴野栗山、尾藤二洲、古賀精里の外に數多く出てをるが、何れもみな聖經賢傳の研究に頭をうづめて一點其外の事に出でぬのみか、それで各々一生の精力を費してをる。これは學問文化として重要な事ではあるが、大阪のそれに對して非常な差異が見られるではないか。

○

其後明治維新に至り、凡ての學院私塾は廢止された。然るに大正に至り始めて大阪に於てのみ昔の姿で懷德堂が再建された。これは他に其例がない事である。

これは大阪に財力の豐富なる事にもよるが、一面實學の念の盛んな事が隱然內にあつて其因をなすものであらう。

明治卅七年に住友家で大阪圖書館を作つて府へ寄附するといふ議が起つた時、わたくしは商業利益を主としてゐる土地柄だから、圖書館に入つて書物を讀む商人は少なからうと思つてゐたら、出來上つて見ると案外にも之を利用する人が多く、いつも滿員の盛況で、順番を待たねば入れぬ狀況であつたのである。其利用者の多い實狀を調べて見ると、或ひは工業の圖案意匠を研究するとか、產業方面の沿革來歷等の文獻を涉獵して實際の仕事の役に立てたいといふ人が多いので驚嘆した事である。

○

懷德堂が再建されてからは、主として聖經賢傳を考究して德性を涵養する事を第一の項目としてゐた。當時大阪には大學に文學部がなかつたから、聖經賢傳を講ずる事も必要ではあつたが、然し乍ら實學を貴ぶ大阪に於て單に聖經賢傳を考究するだけでは物足らぬ感じがあり、當時或ひは寄宿舍を設けて人材の養成をするとか色々議論があつたが、これ等は第一其人を得なければならず、それが容易でないし、また尠からぬ經費のかかる事であつたので、これ等の事は他日に讓つて聖經賢傳の講義をする事を主に致し、四十年間其方針の下に狩野、內藤兩博士顧問を始め京都大學諸先生の絕大なる御援助を得て、德性の涵養には幾分寄與した事と思ふ。其間に於ける西村天囚先生以來、松山、財津、吉田の三教授及び講師諸先生幷に永田理事長、今井、木間瀨兩常務理事には一方ならぬ盡力があつたのである。

○

戰後の今日になつては阪大を初め二三の大學に文學部

が設立され、この方面の學究的な事業は之を大學に依託し得る事となつたので、懐徳堂今後の使命は當然民間各層の文化的意想を盛り上げて益々實學の特長を發揮する方向に伸張さすべきであると考へるのである。幸ひに阪大文學部に於かれてこの間の消息を理解して居られるので、今後は大學と緊密なる提携を保ち、協力の下に大阪人の手に依り、大阪人の爲に勝れた文化事業を發展さす事を希望するものである。

懐徳堂の四十年を回顧して平素の所感を述べて大方の御一考を煩はしたい。

懐徳堂の思ひ出

武内義雄

經師不易況人師
懐徳堂成有表儀
更喜君歸自燕北
儒風從此足支持

これは私が堂の留學生として北京に遊び歸阪した際、西村先生から頂いた詩である。この詩の中に先生の堂に對する理想と私に對する期待を簡明に述べられてゐる。先生は懐徳堂を經の研究や講釋をするところでなく、人格によつて市民を導くべきところだと考へて居られた。そして私に立派な人格者と成つて大阪市民に儒風の感化を與へるよう努力せよと望まれた。私は經師にも成り得ないが人師として立つ自信がなかつた。しかし先生のみ教に從つてその人師として立つ修養につとめなければならぬと考へてゐた。

その後大阪にかへつて、懐徳堂の講師として二年間講義を擔當した。その講義の一は、曾文正公家訓の講義であつた。私はこの講義によつて非常に此本が好きに成つた。私の研究法はここから得たものである。堂の聽講生の中にも、コンナ面白い本は見たことがないと喜んでくれた。この書は、曾國藩が長髪賊平定の陣中からその子等に送つた書札をあつめて家訓としたもので、子等の學問人格に尤も力をこめてゐる。もし私の人格が立派であつたならどんだけ面白く力強い感化を與へ得たらう。私は仙台に移つた後、仙台放送局開設の際たのまれて、その中から十一篇を選んで暫く連續放送を試みたが、その放送は案外評判がよかつた。私は益々この本が好きに成つた。それは私の愛讀書の一つである。昭和二十二三年の頃その全部を飜譯して出版したいと考へたが、日本は戰後情勢が變つて出來なくなつた。その原稿は今も尚ほ本箱の一偶に靜かにねむつてゐる。その二は諸子概説で

あつた。この講義は東北大學で行つた支那哲學史第一期と略同である。後に昭和十年頃京都弘文堂から諸子概說として單行された。それは大分修定したが、要するに懷德堂講義に本づくもので、私は懷德堂を夢みつつこの稿を起した。

大正十二年に東北帝國大學に法文學部が新設せられ、私も支那學講座を擔任する樣に招かれた。その時先輩諸先生に相談すると、皆大學に移ることを可とせられた。しかし西村先生の期待にそむいて東北に移る決心はつかなかつた。先生は最初私を東北に讓ることに反對であつた。その後數日してお目に懸つた際は、それでは先づ東北に行つて一旗上げて晩年懷德堂に落付くかな。その方が双方の利益かも知れぬ。しかし、晩年僕がかへれと云つた時は必ず歸らなければならぬとの話で私も東北に移ることを決心した。先生は君が仙台へ行くなら僕も一度遊びに行かうと仰出され、東京から仙台へお伴した。仙台へついて第一夜は瀧川君山翁の宅に、第二夜は私の宅に泊られ、第三夜は松島白鷗樓に泊つて、翌日中尊寺へお伴した。中尊寺から歸られた先生は再び君山翁宅に一泊せられ、次の古詩をかいて示された。

五城訪二子　暫此寄萍迹
前宵君山廬　今夜宜卿宅
宜卿富春秋　鬱乎有學殖
百家無不通　群言傾瀝液
殫精讀皇疏　校訂尤詳覈
考据其所長　惟恐好而僻
我聞學有方　義理尙尋繹
聖人垂微言　須開其奥賾
詞章有體要　咀華須入格
三者不廢一　兼之謂儒碩
篤學如君少　才亦不易獲
況今爲人師　國庠主講席
弘道扶綱常　吾輩素有責
願君閎其中　以救斯文厄
諄々事誘掖　討論相資益
二君顧從來　歎談朝與夕
三人對一樽　探勝共杖策
松島中尊寺　東國早逢秋
世事亦加劇　分袂遽登車
遙々雲山隔　遊仙台賦武內宜卿併呈
君山學兄教正　弟邨彦初稾

五城は仙台の別名、二子は瀧川君山翁と私、君山翁と

私を訪ねて仙台まで來り、暫くここに足をとどめた。昨夜は君山の家に今夜は宜卿の宅に泊つた。宜卿は年は若いが中々學殖はある。百家の書をよみつくし群言を研究しつくし、かつて懐徳堂にあつて論語の皇疏を校勘、校訂尤もよろしいといはれた。考据はその長所であるが又好んで僻する心配もある。我が聞くところによると學問には義理・考据・詞章の三の方途がある。聖人の教は深淵であるが微言でつかみ難い。その奥旨は考据によらなければ明かにしがたい。その研究は立派な文章にかき上げなければ後世に傳はらない。ところで文章には體要格式があつて、言葉の花を味ひ格に入らなければならぬ。この義理・考据・詞章の三方途を兼ねそなへて初めて大儒といはれる。君の様な篤學者は稀れで、學才も中々得られない。まして今度は國學の教授となつて講座を擔任するといふから猶更重大である。道を弘め倫常を明にすることは無論吾輩らの責任である。君はその中に貯へたところを開いて斯文の厄を救ひ玉へ。君山翁は眞に老成の大儒で、第二高等學校にあつて教育に從事して居られる。兩君はいつも相往來して討論相資答して學問の開發につとめよ……と、こんな話をして朝から夕まで三人が一樽の酒をくみかはしつづけた。そこで松島・中尊寺へと探勝の杖を曳いたが、東國は早や秋風立つて、東京では加藤首相が薨去せられ、世事がいそがしくなつて來た。乃で袂を分つていそぎ汽車に登ると、遙かに雲山に隔てられた。これがこの詩の大意である。そして「兩君頗從來、對論相資答」の二句がその主要意味である。先生はいそがしい中をわざわざ仙台まで來て私を君山老に紹介し、私の學問に便宜を與へて下さつたのである。私はこの詩をよんで目頭のあつく成るのを覺えた。斯様な先生の下に生々した市民の教育に從事するのは何たる幸福であらう。私はこの詩をよんで懐徳堂がなつかしくなつた。然し先生はその後一年で長逝せられた。私はいつもさびしくこの詩をよんで堂を思つて泣いた。私の著述中に時に堂の學問にふれてゐるのは、その感慨の溢れたものである。しかし歳月は早いもので、その後二十三年夢の様にすぎた。或る年、記念祭典に招かれて「懐徳堂の經學」と題する講演をしたことがある。これは先年文部省の主催で日本學術講演會が京都で開かれた際、朝日會館で行つた「仁齋先生の經學」の次ぎに來るべきもので、私の日本經學史の主要點である。仁齋は孟子で論語をよみ、懐徳堂の履軒先生は中庸で論語をよまれた。これは仁齋の上に一歩をふみ出したものである。この講演は私の懐徳堂の經學に對する全貌であつて、私の堂に關する結論である。（この時の講演と略同じ話を大阪市市民局振興

會で行つたことがあつて、その内容は「大阪の先賢と史蹟」の第六輯に收められてゐる。）この講演は私としてもよく出來たと思つたが、恩師狩野先生と、堂の學主中井家の裔天生翁からもほめられてうれしかつた。終生忘れがたい思ひ出である。

さて仙台の二十三年も夢の様にすぎて停年も近づいた。その頃宮内府から

皇太子殿下が小學校を終へられて、中學に進學遊ばされる。乃で東宮御學問所を開く筈だが君に倫理の講義を委囑したいとの交渉をうけた。私は頗る迷つたが、遂に東北大學を辭して東上することになつた。然し戰爭に敗けて市街は焦土と化し、御學問所の設立は押へられる。殿下は學習院に入學遊ばされて、私は只特別の講義を申上げることと成つた。私の御進講は教育勅語にあらはれた德目を敷演して東洋の道德思想を御說明申し上げたつもりであつた。それから又每週一回お習字の御相手を申し上げた。智永の二體千字文を御手本にして頂いて御習ひいただいたが、側にあつて御注意申上げることどもをよく御呑み込み遊ばされてお書きになる御敏捷の才は敬服の外なかつた。

兎角するまに三年はすぎ殿下は中學科を御卒業になり、高等科に御進學遊ばされた。丁度その頃私の身體に脉搏が亂れて不安を感じる様に成つた。乃で東宮職を辭して鄉里にかへる決心をした。大夫の懇々の慰留を謝つて歸るのは試にかなしかつた。然し歸つて見ると一木一石まで幼時の思ひ出の種子であり、又時には大阪に出て懷德堂の講演會に顏を出すことができたのもうれしかつた。

西村先生は懷德堂は大阪の文科大學である、阪大に文學部が出來た時はそれに合流すべきだといつて居られた。懷德堂は戰火に燒かれたが、幸に書庫だけは助かつた。堂の理事者はその藏書を新設阪大文學部に寄附し堂の世話を賴んだ。乃で木村教授が萬端の世話を下さることに成り、事實上阪大に合流することになつた。それから每年春秋二期に堂の講演會が開かれることに成つたのは幸としなければならぬ。しかし今一つ望蜀の願をきいていただけるとなれば、この講演をもつと充實してその内容を印刷してもらひたい。それから每週一回恒例の講義が欲しい。講義は經典を履軒先生の七經雕題でよんで頂きたい。私は清朝經說の代表として王引之の經義述聞を尊敬する。之に對し日本人の經說として履軒の七經雕題略を好む。前者は古注によつて經說を批判是正したもので、後者は新注の誤を正したもので、卓見が多い。日本人の經說として優秀なものである。乃で新注に依つて之を雕題で是正することは堂の學問をつぐことに成り、又讀書

眼光を養ふことが出來る。同時に人心の教養に役立つであらう。これだけが私のお願である。

懐徳堂に關する思出

鈴木虎雄

○

懐徳堂は創立以來四十餘年になるので、何か思ひ出を書けとの依頼がありましたので、主として私自身に關したことについて申述べます。

創立當時、私は支那に留學中でありまして、歸朝した時には、已に堂はできてゐたのであります。そのうちに講義を依頼されまして、杜甫・白樂天・陸游等諸家の詩を講じました。又特別講演も數回やりました。最後の講義は昭和十九年六月二十四日に講了しました「朱子の齋居感興詩二十首」であります。此詩は單に字句を弄ぶといふ様な文藝的のものではなく、朱子の經學・史學・哲學に對する思想の根柢がのべてあるもので、朱子の詩中で注目すべきものであります。それで、文學者よりも、道學先生の側で尊重されたものなのであります。その頃は、今回の大戰已に酣で、二十二日には獨逸の流星彈が英京ロンドンに飛び、又吾邦では、後亀山上皇にちなんで、七月七日から一週間、石清水八幡宮で戰勝祈願祭が行はれるといふので、二十三日私は朝日新聞社の依頼で「殲虜吟」といふ詩を作りました。朱詩の講了は實にその翌日の二十四日でありました。講了について私は

堂中　講ジ畢ル　紫陽朱子ヲ　ささす　の詩
耿耿タル　憂心　略ぼ　自ラ知ル
南渡ノ衣冠　奔走ノ日
北庭ノ金帛　送輸ノ時
一原　妙ハ契ル　天人ノ理
廿首　遠ク開ク　文教ノ基
東海ノ書生　須ク反覆スベシ
精光　豈獨リ　言辭ニ在ルノミナランヤ

といふ拙詩を賦して自己の記念といたしました。

同じ年の十月一日は彼のサイパン島の軍民三千五百人の全滅を聞かされた日であります。その七日に堂で講演があり、私は「支那人士の忠義觀」と題する話をいたしました。これは私の特別講演の最後のものであります。此日の晩は暴風雨でありまして、已むなく本町の某旅館に宿泊しました。時に、『行潦　靴甲ヲ沒ス、參參トシテ　街葉鳴ル、君ガ爲メニ　忠義ヲ說キ、風雨ニ　華城ニ宿ス』といふ拙詩があります。

當時私は京都に住んでゐましたので、堂の講義がすむと京都へもどりました、家に歸りつくのは夜十一時頃であります。或る夜、堂用の「靴の上にかぶせる袋」をはいたまま歸り、人々に笑はれたことがあります。又、講義のためではなかつたのですが、大阪へ赴く途中、スリにかかつて葭口をとられ、梅田につくと一錢もない、已むなく堂まであるき、堂で藤塚幹事に金を借して頂いたことがあります。老衰が加はるにつれて、夜おそく京都まで歸るのは疲れますから、本町橋の上流及び下流の、堂とは程遠からぬ商人旅館に時々とまりました。盛り切りの麥飯に、お汁一杯を喰はされる時節でありました。

今や堂制はそのままであるが、講座を阪大文學部と共同で行ふこととなりました。この新堂關係の講義にも、私は一回出席しました。堂の精神が維持されさへすれば、新方法必しもわるくはないのでありませうが、大學となると或る學問を專攻する所となり、大衆とのつながりは薄くなるおそれはなからうか。できることなら市井の修業者の便利になる樣な工夫をもやつて頂く樣にお願ひしたいのであります。（終）丁酉六月下旬稿

懷德堂の思ひ出

阪倉篤太郎

○

私が懷德堂へ行き出したのは、昭和四、五年頃かと思ひます。それまで萬葉集の講義をして居られた林森太郎先生がやめられたので、狩野（直喜）先生から、その後へ行つてはどうかと言つて來られました。私は大阪生れなので、故郷の學校へ顏を出すということは非常にうれしく、一も二もなく承知した次第です。しかも大阪の町人を教育した學校といふので、非常に興味を感じました。それが私の懷德堂へ行くやうになつた一番の動機なのです。

懷德堂の聽講生で感じたことは、質問は殆どしないし、たよりないというやうな感じでした。けれども感心したことは、非常に熱心なことです。それはむしろ三高の學生などより熱心でした。

それから懷德堂は、今は阪大と協同でやつてゐますが、やはり懷德堂というものは、今後といへども單に阪大に附屬するだけのものではなく、獨立して、町人學校——町人を教育する學校といふやうにしたいと思ひます。そ

れで町の中にできたら聽講者も多いですから、ターミナルにあれば、郊外から來る人でも非常に便利だと思ひます。やはり大衆的な大學といふやうな性質の、別に大學という名をつけなくても、大衆と密接に結びつくようなものにしたいと思ひます。

又授業料というようなものを取つてもよいじやないかと思います。ただ無料では施療みたいになるから、少しは取つてもよいと思います。それから專任の教授というやうなものがあると、いかにも獨立して居るという感じを與えます。さうなれば、堂友會も勢力ができて來ます。

又講義の中に謠曲の講義などを入れると、同好者がありますから、さういふ人が一週一回聽講に來るといふやうになります。謠曲の講義は、まだどこにもやつていないです。謠曲を習つて居る人でも、何もわけがわからずにやつて居る人があります。さういふ人に對して講義をして、意味を教へればよいと思います。さういふやうにして庶民との結びつきをつければよいと思います。

（談話、昭和三二、八、二八、藤塚筆記）

懐徳堂を思出して

石濱純太郎

○

誠に往事は茫として夢の如くなつてしまつた。漢學に從事して來た私であるんだが懐徳堂の舊事なんかでも殆んど夢か幻かの如くで思出すことがむずかしい。思えばよくも荒疎したものである。然しそれも無理でない事もあるにはある。漢學を東京で修めたとは言へそれを一生の本業にしようなどと初めは考えていなかつたからである。それは自然と漢學研究に引張りこまれていつて迂儒の生涯となつてしまつたんだ。引張りこんだ人々には懐徳堂の諸先生が居られる。

懐徳堂の記念祭が計畫されてる時分には私はまだ東京修學中であつたから何も知る筈がない。それでも漢學修業中であつたせいか早速申込んで懐徳堂遺書を頒けて頂いて喜んだらしい。勿論記念會の何かへは出席出來なかつた。學校を卒業して歸阪すると兵役で一年は家に居られない。これも無事勤めて歸宅してブラブラしていると或日に西村碩園先生が過訪せられた。有名なる天囚先生の青二才來訪で大に恐縮したものである。多分先生の學

友であられた恩師岡田甫西先生が受業の私が卒業して大阪へ歸つたとても言及されたので勉強をさせんといかんと思われてわざわざ枉駕されたのであろう。そして御親切にも當地に景社と言う漢文を作る會があるから加盟して勉強するがよいと勸められた。先輩の後進を誘掖せらるるの盛意は佩服の外なかつたがまるで同輩扱いせられるのには閉口した。かくて景社の緣によつて武內誼卿先生と相知るを得たのであつた。後に碩園先生は武內君は懐徳堂に申分のない先生だから純粹大阪人たる私に將來には後援するよう語られた事があつた。私は何につけても大阪大阪と自慢する癖があつたからだろう。

武內先生を知つてからは段々私は支那學に引張りこまれた。引張りこまれるどころか大に啓發され全く學問の師であつた。先生に追隨しようと一生懸命になつたものだ。後に先生が東北大學の懇請により懐徳堂を出て仙台へ赴任せられると聞いた時には憤然として往いて碩園先生を詰問したものである。武內君の如き人は少ない、懐徳堂が此人を失う如きは大阪の大損害である、須らく武內君を無理にも大阪に留めようではないか、なんどと論じ立てたものである。碩園先生は、いや大學教授を養成して他へ供給するのも懐徳堂の一つの仕事ではないか、と說き聞かされた。そうかなあとも思つたが自分にとつては不滿遺感なことであつた。

景社が緣をなして私は京都の麗澤社の諸先生達にも益を請う機會を得るに至つたのは大にありがたかつた。景社は麗澤社と時には聯合文會が開催されたからである。景社と言えば懐徳堂の方々が主で麗澤社は京都大學の先生方が主であるから懐徳堂と京大との連合會のようなものであつた。因に景社は碩園先生の上京後も續いていたが大戰末期の頃に消えてしまつたのは致し方もない。

武內先生の仙台行きの頃に王靜安先生が節に殉ぜられた。丁度その時分に我々三四人が東洋學會を持とうと相談していたのでその會を組織して靜安學社と號して出發した。この學社は例會集合處として懐徳堂の講堂を使用することを許されたので大變に懐徳堂の御厄介になつたものである。靜安學社へ寄贈される書籍が段々集つて來るようになると堂內に積み置くことをも許された。勿論學社の事務所もここであつた。戰災が懐徳堂を燒き拂つたので學社も消滅したと同樣になつた。終戰後一二回は復興の會合を持つたが機運未だ到らないか音沙汰もない始末である。

懐徳堂は恰も大阪の漢學の根據地のようであつた。それは景社と靜安學社とが厄介になつたばかりでない。東京から大阪で漢學大會を開きたいと始めて言つてきた時

も懐徳堂のお蔭で立派に催うされた。因に去年の大會にも後援された。あの時のことで思出すのは知事さんが臨場して講演を聞かれた。我々はそれを喜んだが、何かの義理で來ているのだから直ぐ歸ると思つていたら中々場を立たうとはしない。ついて來た屬官が何度か催促しても動かない。屬官がウロウロして困つていたのは一寸うれしかつた。後で何が氣に入つたんだろうかと噂をし合つたものだつた。又或時中國から劉文典先生が碩園先生百騷廬舊藏の楚辭類を觀に來たものである。先生はただ大阪の懐徳堂とだけ聞いて來て大阪驛附近で大にまごついたと言う。よく訪ねてこられたものである。又或時錢稻孫先生だつたかが中國學生の修學旅行員を連れて堂を訪ねて、玄關前に皆を集めて解說しているのを見た。修學旅行のスケジュールに懐徳堂がはいつているなんかは我國でもあるかしらん。それが中國學生であるから驚きもしたが喜んだ。こんな調子の懐徳堂は今言うならば中國文化センターであつたわけだ。今は當地も大學が幾つも出來ているが矢張りこんなセンターがあるといいと思出す。

先代永田仁助さんは泊園書院の關係もあつて御懇意に願つていた。いろいろ教えを受けた事も多いが段違いの大人だつたので我々青二才にはよく分らなかつたらしい。松山春城教授も先生が私を敦煌屋扱いにして夏期講座を強制せられた事を思出す。財津愛象先生とは家も近かつたし學問上でも何かと交渉があつた。歿せられた際お通夜の席上で諸友と共に戒名を選んだ事を思出すがその戒名も忘れてしまつた。吉田北山先生とは長い交情を辱くした。大阪漢學史についてはいろいろ啓發して頂いた。先生が編纂して遺された資料は今にして思へば全部を移寫しておくべきだつた。北山草堂叢書はどうなつているか、うたた感慨に堪えない。

懐徳堂の私にまつわる思出はそれからそれへと出て來そうなものだがそう活潑には出てこない。暑さのせいではなく私の耄碌のせいに相違ない。

懐徳堂講座七ケ年の成績を省みて

木村英一

懐徳堂講座が發足してから、早くも七年になる。私はばからずも講座運營の委員に推されて、毎年春秋二度の講座の企劃と實行とに携はつて來たのであるが、省みて微力を愧ぢると共に、この講座がささやかながらも着實な發展の道をたどり得たことについて、深い喜びを禁じ得ない。

最初私は、戰後の懷德堂が、阪大と協力して事業を行ふことになつたと聞いた時、直ちにその方針を、共感を以て理解することが出來た。思ふに戰前、大阪の大學には未だどこにも文學部がなかつた時、懷德堂は民間の文科大學を以てみづから任じて、種々の文化事業を行つて來た。今や阪大に文學部が設置されたので、それとの緊密な提携の下に、將來の事業を考へようといふのである。當時は戰後日もまだ淺く、何をするにも不自由勝ちであつたが、取り敢へず直ちに實現し得る事柄から着手することになつて、講座の開設が計畫されたのであつた。從つてこの講座の健全な發展の跡は、大學と懷德堂との協同を、實踐によつて具體化した第一歩でもあつたわけである。

運營七年の期間を通じて、私は二つの喜ばしい事實を發見することが出來た。その一つは、戰災の劫火に散亂したかに見えた堂友會には、尙ほ僅少ながら熱心な會員が殘つて居り、また廣く大阪の各界には、かくれた支持者が少くないことである。今一つは、阪大のみならず、廣く京・阪・神の學界人の間に、堂の事業に協力を惜しまない御好意を見ることである。實際今まで十數回を重ねた講座の運營に當つて、例へば講師の依頼、その他について、支障を感じたことは一度もなかつた。この二つは誠に有り難いことであつて、委員としては今後ますます善き企畫と運營とに努力して、以て御理解に應へることを期する外はないが、この上ながら、大方の御支持と御助言とを庶幾して止まない次第である。

講座運營委員の一人として、言ひ得るところは以上の如きに過ぎないが、假りに委員の立場を離れて考へれば、私にも望蜀の心がないではない。既に一部熱心な方々の間には、講座の外に定時の講義を開いて欲しいといふ聲もあるが、これは誠にもつともなことである。思ふに戰後に於ける財團法人の規模は大きくないのであるが、もし將來諸種の事業を裏附け得るだけの規模を備へ、萬端の準備を整へ得たならば、これは決して望み得ないことではなく、私自身の視野から言へば、その際の講師の斡旋の如きは、現狀から推しても必ずしも困難ではないであらう。また、もし餘力が充分に蓄積されたならば、講義の外にも更に種々有意義な事業を考へることも出來るであらう。若し夢を描くことがゆるされるならば、私も亦人後に落ちるものではない。しかし思ふに、堂の事業の如き永續性が要求されるものは、すべてよく事態を見極めて愼重に計畫を建てるべきであり、結局長い目で見ることが必要であらう。そしてその計畫を推進する基礎となるものは、どこまでも各方面からの御理解と御支援

との一層の増大であり、また、それによつて形成される機運の到來でなければなるまい。

實業家も、學者も、藝術家も、教育者も、はたまた學生も、それぞれに自己の本業に忙しいのが常であるが、時に互に相接して語りあひ、力を合せて共に教養を高める道に進むことが出來たならば、まことに樂しくもあり、また有意義であるに相違ない。そこでこの要求を充たす爲めに、よく考へてよい計畫を立て、この様な集りをもち得る機會を定例化し、或は進んでその様な役割りを果す機關を常置することが考へられる。現在既に定例となつた講座も、畢竟この様な意味を帶びるものに外ならない。若しこの計畫にして充分な成果を收め得たならば、その基礎の上にこそ、眞に大阪人の協力による特色ある文化事業を、堅實に展開する道が開けるであらう。私は今、講座運營七年の成績を回顧して、この様な可能性が、決して空しいものではないことを實感する。そこで一言この所感を申しのべて、堂の將來についてお考へ下さる方々の御參考に供したいと思ふのである。